

ひとり立つこと

—— 表現と自己実現 ——

竹内敏晴（南山短期大学教授）

自己実現という用語は、私はまだ内容を十分限定できない。マーロウはじめ多くの人が論じているが、私にわかりよい定義は、河合隼雄のものである。「人間の心には意識の支配をこえた自律性を潜在させており……生き方の新しい方向性を見出そうとする」。これは自己実現の力について述べた文であって、「実現」を完結する行為としてでなくプロセスとしてとらえようとしている。一つのことばが私において真に成り立つのは、概念・規定を理解することによって足りることではなく、そのことばで限定する（あるいは定義する）以外ないような経験があって、真に成り立つものだ、というのが、私が森有正から学んだことの一つだが、私にとって自己実現ということばについては、それが未成熟なのだ。

表現とか芸術の仕事にかかわっていれば、あ、これは新しい自分だ、と感じる瞬間や達成がある。たとえばこんなことがある。数年前に人関にいたHさんとか今年2年生だったKさんなどが代表的な例だが、一般化していうと— 入学したころは、かぼそいカン高いキレイな声で、しなしなとうたうような表情で話す少女がいた。コーラスのグループでもソプラノのパートを受け持っているという。だが声の質は単調でいつも変わらず、喜んでみせても考え込んでも変わることがない。語調にもまるで抑揚が乏しく、情感が伝わって来ない。

〈表現〉のレッスンで、まずからだの力を抜く訓練をつづけ、息を深くし、上体をぶら下げてのどと頸との力が抜けた状態でラララーと声を出してみる。あるいは、立って、私の肩をしっかりとつかんで、ぐいと押しながら話しかけてみる。するとあるとき、いっぺんに音程が低くなり豊かな、むしろ太い声が流れ出た。くり返してゆく度に声が安定し、息が楽になってゆく。かの女自身はなぜこんなことになるのか茫然としている。どんな感じ？と尋ねると、自分じゃないみたい、と言う。汚い声に感じる、と言う場合もある。しかし楽です、何

もしないのに声が流れ出てゆく感じ、と言う。もちろんふだんの生活に戻るとまたもとのカン高い細い声になってしまう。またレッスンで新しい声に挑戦してみる。しばらくふたつの声を行き来しているうちにかの女の声は定まってきた。尋ねてみると、低い声の方が好き、と言う。この声だと、自分の中になにか気持ちが動いたとき、それがそのまま声の変化にあらわれる、ああ私がしゃべっている、と感じる、と言う。前の声はずいぶん力を入れてムリに出していたのだと今になってわかる、ずいぶん作った声だったんですね。

これを、本当の自分に出会うということのプロセスの一つということではできらるだろう。声と共に、立つ姿が変わってくる。顎を引いたり首をかしげたりして声を出していたのが、まっすぐに首を支え、らくらくと立つ。私などの言い方だと、からだに軸が通って、すっきりと足の裏が地について立つ。するとかの女自身の存在感が変わってくる。他人と、そして世界と向かいあう感じが変化する。人によっては、人の顔がはじめて見えてきた、という言い方さえ出ることがある。これを自己実現の一つのステップと呼んでもいいだろうが、しかし新しく気付いた、あるいは生まれた自分とは生まれた時節のことであって、それが私をどこへ連れてゆくのか、また継続して働く力としてホーナイなどが名付けるような「真の自己」あるいは河合のいう「自律性」と呼ばれるようなものを設定できるものかどうかは知ることができない。

・プラスの自分

少し前のことになるが「魔女の宅急便」というアニメ映画があった。宮崎駿監督で、ストーリーも作画もみごとな出来栄えだった。魔女の血を引いた女の子が、十三才になると父母から離れて——この母親が魔女なのだが、これが一主婦になり切っていて、時に化学の実験をやって新しい薬を作ったりしているところが面白いが——箒に乗って空を飛び、一人立ちの旅修行に出かける、という話である。ある町のパン屋さんの二階に棲みつき、空飛ぶ能力を活かして宅急便を始める。人々の誤解やら裏切りやら淡い恋やらで挫折を味わったかの女は生来の飛ぶ力さえ失ってしまうが、友人たちのはげましを支えに、大きなアクシデントを乗り越えることで力を取り戻す。

ここには、日本の社会の中に形を取り始めた「自己実現」の神話の姿がある。現在の日本の管理教育、つまり常に価値の基準を自分の外に置いてそれに従うことを求める風土の中では、生活の層において成り立つのは容易ではないが、ファンタジーの世界においては、外に現れ切れないまことの自己というものがあって、それが成長し現れて来るという考え方は、明らかな力を得て管理に歪むからだの解毒剤として働いている。十三才という年齢設定も自立から自己実現というプロセスにふさわしいし、「セーラームーン」などに現れる少女の変身願望もこれに連なっているだろう。これは、肯定的な自己、プラスの自分の存在を想定しようとする試みである。

十三才の少女と言えば、日本の昔話では「アマンジャク」に取り憑かれたり、さらわれたりする年頃だ。「としごろ」になると急に「血が荒れ出し」て親の言うことも周囲の意見も受け付けなくなる。揚句の果はどこへ隠れたか欠け落ちたか。そんな見果てのつかぬ身動きの危さをこの話によく伝える。私の育った東京、というよりまだ江戸の気っぶの残っていた下町では「アマノジャク」という呼び名は少女にしか向けられなかった。幼い自我が分解した先はどこへ身ぐるみさらわれてゆくか判らない。幼いころ身についたこっちの話のほうが私にはよほど怖い。といっても、昔話のまとまった形としては、アマンジャクにきものを剥がれ、機を奪われた瓜子姫の本体ははだかのまま柿の木のでっぺんに縛りつけられて、とんびなどの声によってその存在がじいさまばあさまに告げられるのだからお嫁にゆけるようにちゃんと保存され、発見されることになっている。グリムの昔話集に出てくる眠り姫は十六才だが、茨や竜に化して現れるかの女の分身——と私は思うのだが——はアマノジャクより三才分成熟して強大とも言えるかも知れない。そしてかの女の「ほんとうの自分」は眠っている。「魔女の宅急便」の主人公には、「魔女」という血統書がついていて、つまりは既知の「自己」が、ある苦難を経たのち実現する、という予定調和的ストーリーなのである。

・マイナスの自己

十数年前「ことばが劈かれるとき」の再版の折に私は初めて「あとがき」を書き、その中に「からだの問題に手をつけるのは、地獄の釜の蓋を開けるようなものだ」と記した。このことばは時々引用されるようになったが、実のところは使い方にある錯覚があったことに大分経ってから気がついた。子どもの頃耳についていた諺は、正しくは「地獄の釜の蓋も開く」であって、正月とお盆には地獄の鬼も亡者を責めるのを休む、という藪入りのお休みのことだったが、これを書いた時私の脳裏にあったのは、少年の頃読んだ水滸伝の冒頭で、神仙が封じた洞穴の蓋を、皇帝の使者として来た洪大将が無理矢理開かせたところ、まっ暗な底から突然ごうと轟いて、百八つの妖星が尾を曳いて天下に飛び散ったというイメージだった。百八つは仏教で言う百八つ煩惱から取ったのだろうが、わがからだの底の奥には、時が来ればほとぼしり出て私をむさぼり喰いつくす化け物が潜んでいるという怖れはいつの頃からか私に根付いて消えることがない。これを仮に「マイナスの自分」と呼んでおこう。イエスさまだって「人から出るものが人をけがす」とおっしゃっているのではないか。「人の心からは邪念が出る」「不品行、盗み、人殺し、姦淫、欲張り、悪意、悪巧み、道楽、妬み、悪口、高ぶり、愚かさ」数限りのない「悪」たち。「神ただ一人のほか善いものはない」。(マルコ福音書・塚本虎二訳)

世間＝企業社会の管理によって縮み歪み、息の詰まっているこのからだに気付き、それを解き放ってゆくことは「いのち」を取り戻すことだ。その息づか

いはまぎれもないのだが、そこにはプラスの自分もマイナスの自分も姿を現わす。善も悪も未分化の混沌の渦である。そこに想定されて来る自分とは、ある方向へ「自己」を「実現」してゆくようにコントロールされたものでなく、荒れ狂う矛盾であり、欲望の津波である。表層意識のかぼそい自我が、これを統御しうる力を保ち得るかどうか。「魔女の宅急便」の突風に吹き落とされ大揺れに揺れる飛行船はそのシンボルと読めぬこともない。

仏教の唯識思想では無意識の最も奥深い源泉にアーラヤ識を置く。アサンガ（無着）は攝大乘論の中で、いかに瞑想・禅定を深めても、ついにはアーラヤ識に帰着してしまい、アーラヤ識そのものが根源的に転換すること、即ち解脱はありえない、と言い切っている。これを知った時、私は鈍器で心臓をなぐられたように感じた。後に、大乘思想が発展してアーラヤ識中に仏性の種子——つまり、ここでいうプラスの自分——を見出すようになることを知ったが、「悉有仏性」はいまだ私の身につかない。ユングは晩年、個性化の過程ということばで、自分の無意識の奥には自己統御の力が現れて来、普遍的な「自己」が姿を現すことを考えていたようだが、そのプロセスは容易なことではないようだ。

その認識の故に、東洋の、たとえば禅や密教、宋の理学などには厳しい自己統御の修行の階梯があった。だがいかなる修行もついに及ばぬ、というよりはむしろ修行によってねじ曲げられた根元力の凄じさは、今昔物語もいくつか語っている。近くは中勘介の「犬」を読めばそのおぞましさに嘔きたくもなる。親鸞の覚悟は「いづれの行をもをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」だった。道元は、菩提は捨家出家の日に成就する、とまで言い切って世間を捨てることを学道の第一に置いたけれども、捨家とは世俗の欲を捨てることにつきるものではない、と今になってようやく私は受け取る。結局は「おのれ」を捨てることであり、悟って仏になろうとする望みさえ、わがためならば我執であればこそ、自力門の道元が「ただわが身をも心をとほなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて」と書くのであろう（正法眼藏「生死」）。「自己」実現よりは、自我の放擲であり捨我である。そこに現成する仏のおんいのちが、普遍的な「自己」と呼ばれるものに相当するかどうか私は知らない。少なくとも、そのように予定調和風に観念化したならば、生きた信仰は死ぬのではあるまいか。「念佛は、まことに浄上にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざる」（嘆異抄） 放擲である故に。

。

四十九年前、敗戦の後呆然としてたださまよい歩いていた二十歳の私は、魯迅に出逢って自分を憎むことを学んだ。新しい、いわゆる民主の時代に生きることのできるなにもも私は自分の中に見出せなかった。すでに私は過去の遺

物だった。詩人李賀は「二十歳にしてすでに朽ちたり」と詠じたが、晩唐の爛熟した文化のデカダンスとはまるで無縁ながら、その語句は私の胸に刺さった。しかしそのおのれの歪みを憎むことによって、魯迅においては奴隷根性と名づけられたそのマイナスの形を明確に見極めることによって、いわば写真のネガからポジを生むように、新しい生の形を描き出し創り出すことに賭けよう、というのが私のかすかな、しかし劇しい望みだった。だが以後半世紀に近く、私はなにほどのことを成し遂げ得たか。

・あてどない〈からだ〉

たぶん現在 —— この1990年代 —— は、ひとりひとりの人が果てしなく散り散りであり、自分がしかとひとり立つことがこの上なく難しく、しかも死活の課題になっている時なのだ。明治以来個人の確立ということは、西欧型の人間を理想とする近代化の指標として目指され唱えられ続けて来たわけだが、それはほとんど知識人の理念に過ぎなく、庶民にとっては家やムラの伝統的な生活習慣のルールの方がはるかに重大だった。しかし現在は、なん百年来の社会生活の基盤をなしてきた農村共同体が崩れ去っている。アメリカでさえ十九世紀終わりから七十年ばかりかかったという、家族構成人員が五人台から三人台へ下がるという現象が、日本では1960年代を中心とする二十年あまりで一挙に進行したというのだから、大家族制の崩壊によって「家」から、ほうり出された人、人、人、はまるでバラバラな砂粒のように、あてどなくさまよい流れていく。待ち構えていた大企業が弁当箱に詰める砂みたいにそれをさらい込む。個という「孤」が、もはや存在の現実になった。私たちのあてどないからだ、からだ、からだ。。。。。

「あてどないからだ」は、まわりを見廻し、よそさまに寄り添い頼りつつ、なんとか安定して流れに乗って行こうとする。昔まがいの生活習慣に身をゆだね合って共通のイメージにこもろうとつとめる。なにものが疑似共同体をでっち上げて差しだしてくれれば、その中に逃げこんでホッと安心するのにこれほど都合のよいことはない。たぶん企業社会の管理のイメージは、基本的にはこのお膳立てに尽きるのだろう。企業系列の強化、企業単位の厚生施設、数々のイベント、スポーツ振興業、趣味のグループの育成、生涯学習、カルチャーセンター風施設の拡充などなど —— 、すべては、砂粒を早急につなぎ合わせて企業需要に有効に働かせるための鋳型作り。

だが一方で孤であることに気付いて、立ち、あたりを見廻し、ほかの砂粒へ手をさし出して、なんとか新しい結びつきを試みようとする「からだ」も生まれる。すれ違ったり、傷ついたり、どうせまだだれも知ったことのないつながり方だ、すぐにうまく行きっこはありはしないが、やっこ新しく手を結べたとき、自分のはっきりし他者がはっきりそこに見えるだろう。もし「自己実現」ということばを使うとすれば、取りあえず私にとってはこういうこととしよう

か。これは、自分ひとりの内面を意味するいわば心理的な「自己」ではなく、存在として「自己」を考えることだといってもいい。存在としての「自己」とは、「からだ」を持ち「からだ」であり、自と他の対応しあいつながりあった糸の一項であり（メルロ＝ポンティにならっていえば間身体性、あるいは広義の「身体図式」ということになるが）、また、世界の一部であると共に世界を創り出してゆくものである。この時他者の前に露わにする私、さしのべる手、は、プラスの自分もマイナスの自分も見境はつくまい。選ぶ余裕などないのだから。だが、この根元的な努力は、急速な社会機構の変化の中でなんとかぼそい努力に見えることか。

この、一と二、は当然混じりあいからみ合って進行する。なにがどちらに有効なのかだれもわかりはしないのだ。私、が一地点に立ち、見ようとするそのパースペクティブはまた一步踏み出せばたちまち変貌する。ここにはどんな羅針盤もありはしない。

・したくないことはしない

竹内演劇研究所を十六年間続けて、そこから「からだとことばのレッスン」が生まれたが、この研究所には規約というものが一切なかった。十年過ぎてやっと一つ約束事ができた。別に相談して決めたわけではない。今まで無自覚にやっていたことを気が付いてことばにしたら、みながウンと言っただけだ。

この場では、したくないことはしない。これだけだった。

ある年一人の女の人が参加した。熱心にレッスンをやる。ひと月ばかりして私はみょうなことに気づいた。休んでいるときには眉を寄せて実にイヤそうな顔をしている。あんなにイヤなら次のレッスンはしないかと思っていると、ぱっと立って熱心にやる、笑いもする。だが腰を下した途端に暗い表情になる。ムリして頑張ったってしょうがない、やがてやめるだろうと思っている中に半年のコースを終えた。次のコースには申込まなかったから、やっぱりな、と思っていると、次の期間、つまり一年後にまたやって来た。相変わらず熱心にレッスンし、腰を下ろすとぶすっとしている。

どうも腑に落ちないので、ある日、尋ねてみたら、かの女はびっくりして、え、わたし、そんな顔をしてましたか、と大きな目を上げて私を見た。かの女はある中学校の教師だったが、職場は極めて礼儀正しく、変な感情を表に出すことなど一切許されないののだと言う。それがここへ来ると、どんな顔をしていてもだれもなんにも言わない。思う存分イヤな顔をしていられるんです。

それを聞いた時、私は私のやって来たことの意味がひとつわかった。私はそのような場をここで支えてきた、それだけのことだ。

定時制高校で授業をしている時も同じことだった。初めの頃は普通の教室で授業をしたから、入っていくと前の方にちらほら、窓の方に一かたまり、後ろの隅に一かたまりと生徒たちが固まって向こうむきに顔を寄せ合って話をして

いる。私が入っていったってこっちを向くものなんかいやしない。さすがに初めての時には、私の頭の中にはいつの間にか教室というものは生徒たちが教卓の方を向いて坐っているものというイメージが固まっていたと見え、いささかぎょっとした。しかしまあ平気な顔でひとりひとりに話しかけていると、世話係の教員がやって来て、生徒に、おい、先生の方を向け、とか、話を止めろ、とか注意をするから、私はいつも、いいからそのままにしておいてくれと言った。だいたいかれらにとって面白い話ならこっちを向くに決まっている。生徒がこちらを向かないのは授業が下手だからだ。これが、舞台上演の成否に賭けて暮らして来た私の信条であった。第一、この先公はつまらねえ、と思えば、さっさと教室を出てバイク乗りかなんかにいってしまう連中だ。それが、向こうを向いたなりひそひそしゃべりあっているというのは、私との間にはっきり緊張関係を保っているからだろう。それをこっちから切るなんてことはできない。

トラの飛び込みという少し劇しいレッスンをした時一人の男子が腰を上げなかった。教員たちが説得するがきかない。私は近寄って、イヤならおれはやりたくない、と私にはっきり言え、そしたら私はあんたの言うことを尊重する、と言った。かれは私をしばらく睨んでいたが、ポツリと、じゃあやりたくない、と言って横を向いた。じゃあ、ではダメだ、あんたはあんたのことばで、はっきり言え、と私が言う。一、二度言い淀んだ末に、やりたくない、と小さい声で言った。わかった、と私はレッスンに戻った。後でかれがやって来た。先生ごめんな。さっきは勤め先でいやなことがあってくしゃくしゃしてたからああ言いたかったんだ、とぶのがいやだったわけじゃない……。私は「あやまることはない。あなたが選んだことだ。そのまんまでいいんだ」と返した。

なにがしたいのかを見つけることが大切だ、とよく言われる。たしかにそうだと私も考えるけれども、どっこい、このあてどない砂粒にとって、ほんとうに自分がやりたいことが、そんなに都合よく見つかるものかどうか。私などはこの年までそのこと一つでウロウロして来たのだといってもいい。それは私のおろかさのせいだが。

いやだ、やりたくない、という時、そこにはたしかにその人がいる。そこから出発したらどうだろう。ただし、したくない、とはっきり言い切ること、行動を選ぶことが必要だ。黙ったまま動く、あるいは動かないことは、ただの気分による反応に過ぎないことも多いから。「言い切る」ことは、ひとりであることを自覚すること、それに耐えることだ。別の言い方をすれば、無自覚な表出から意識的な「表現」への歩みでもある。この「言い切る」ことが受身の感受から行動への「回身」になる。それは慣習の中に埋もれている「自然な」自分、匿名の自分への拒絶である。

もっとも、「やりたくない」「いやだ」という日本語は「やりません」と同義に受け取られることが多いが、口に出して言い切ってみれば両者の間には大き

な落差があることがわかる。前者は気持である、後者は行動である。後者はまだ日本語になりにくい。「ロメオとジュリエット」の第三幕でジュリエットが父親に答えるセリフは日本語に訳すと、だれでも「私はいやでございます」になるが、原文は I will not marry. である。気持ではなく行動の表現が定着することと、「ひとり立ち」が生活の経験の中でリアリティを持ち得る時が来ることとはつながっているはずだ。

・「あらわれる」ということ

だから、「いやだ」と言い切ることは出発に過ぎない。そこから自分と言うものの検証建設が始まる。「いやだ」と言う自分がどんな浅い次元の姿であるか、思いがけず深い欲求、断じて許せない自分の性根であるかが、そこで問われて、初めて「表現」へ歩み出るスタートラインが浮かび上がってくることになる。

今年「表現による自己成長」の最後の発表は宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の、ワークショップ合宿時における学生による脚色の上演だった。この中に出て来るタイタニック号で溺死した青年の役を、初めHさんはいやだと言った。併せて上演した谷川俊太郎作「部屋」の女をやりたい、と言うのでキャスティングしたが、初めての稽古の後、私のかの女と話し合った。稽古でなん度もやり直したが、かの女の声はか細くかん高くしなしなして、息がきちっと出ていない。語尾を言いきることができない。「私に感じられるのは、あなたはかわいい女の子を演じているということだ」と言った時、かの女があっという顔になった。「私はHさんという人の声を聞きたいのに、かわいい女の子、のおしゃべりばかり差し出される。やっぱりこの役はよした方がいいんじゃないか、青年役があなたに向いているかどうかはわからないが、少なくとも、男ことばの方がことばの内容をもっと率直に、むしろぶっきらぼうに口に出すことができる、Hさんの声、Hさんのことばが聞けるのじゃないか」と言うと、かの女は「わからない、どうでもいい、やります」と言った。後で聞いたところでは独りで随分泣いたようだ。しかし舞台でのかの女は立派だった。常識外れに私が台本に組み込んだ長さ数ページにわたる原文そのままの長ゼリフを、みごとにしゃべり切って客をしかと引き込んだ。沈んで行く巨船の甲板で幼い男の子たちを抱きつづける光景がくっきりと浮かび上がる。生活の中で勤め続ける「かわいらしい少女」の役から、Hさん自身に脱皮してゆく一階梯はたしかにそこにあった。

その上で —— このようなことも起こる —— たとえば、「表現による自己成長」の時間に、木下順二作「夕鶴」の第一モノログをひとりひとりに読ませてみることがある。「与ひょう、あたしの大事な与ひょう、あんたはどうしたの？ あんたはだんだんに変わってゆく。あたしにはわからない別な世界の人になっていってしまう・・・」

たいていの方は、悲しみ、怖れ、憂いなどさまざまなイメージをどれかの単語やフレーズに託して「表現」しようとする。モノログのことばは、その時、よむ人の切れ切れな思い込みの、言いかえると既知の自分の断片を、外へ投げ出そうとするキッカケに過ぎない。せせこましく美しくない。センチメンタルで力強さが無い。

ところがこんなことも起こる。ある人がよむ。うまくよもうとも自分を美しく「表現」しようなどとも思いもせず、ただ一こと一ことの音をまっすぐに連ねて声を出してゆく。ことばひとつひとつに初めてふれてゆく。と、ふっとなにかが動く。微妙なリズムが揺れて来て、いきなりことばが立ち上がって来る。よんでいる人の情緒の動きなどというはかなげなものでなく、ことばそのものがじかにこっちのからだに歩み入って来る。「どうしたらいいの、ほんとにあたしはどうしたらいいの」、そこに「つう」がいる。

三年前だったか、まだ一年生だったYさんがそうだった。二年生たちは私の後でこそこそ打ち合せめた声を立てていた。それが不意にサインとした。21番教室全体がピインと張りつめた。よみ終わった途端に思いがけぬ拍手が湧き起こった。そこに立っていたのはYさんだったか「つう」だったか。

こういうことを表現したい、と思いきめて語る時そこにいるのは既知の自分である。「自分らしく生きる」ということばを私が嫌うのは過去の自分を固定し美化しているからだ。未知の自分とは、既知の自分を失ってなにかに集中している時現れる。その時には、「自分」だとも決めることのできないなにか、がそこに立っている。動いている。表現とはそういうものだ。画でもダンスでも同じことだろう。それを「ことばとの出会い」と言うこともできる。よむ人の深い層に眠っていたことばの、音の、イメージが呼びさまされて来たのだと言ってもよい。それはたしかに個人の意識を超えた、日本語の古い古い蓄積が聞き手との間に響きあい始め、活き始める瞬間である。

Hさんの例を「自己実現」の一つのステップと呼ぶには少し幼いかもしれない。これは、とりあえず主体としての自我をしかと自覚すること、立てること、つまり自立ということであり、社会慣習——家族の愛情も含めて——の枠を外れて、まことの自分の目指すものはなにかについての旅を始めることの予告にすぎない。

社会的に仕事をし、職業を持ちつつ、あるいはそれから落ちこぼれることも経つつ、旅は続けられなければならないだろう。「からだ」はそれほど矛盾に満ち、豊かであり、Yさんの例を見るように自分を越えるものを含むのだから。

ユングが「個性化の過程」を言い、到達点としての「全体性」「セルフ（自己）」を言うのは中年以降の課題としてである。これを「自己実現」とも呼ぶようだが、この場合の「自己実現」とは、仕事においてなにごとかを達成しえた中年以降の人が、真に人間として生きる充実と呼べるなにかが欠けていることを感じ、精神あるいは霊の探求へと踏み出すこと、を指すようだ。そのとき、

どのような表現の試みも「能動的想像」の意味を持つだろうし、それは繰り返して進むだろうが、ユングの述べるプロセスが、どのように現れて来るかは、私は知らない。それは、私自身の課題であるから。

・みづからを知らん事

道元は、いわゆる「悟り」という終着駅を認めなかった。修証は一つ。修行がそのまま悟りであり、悟りは修行の中にある、ということだろうか。一つのことを言い切る、表現し得れば、さらにそれを吟味し、ひっくり返して逆の視点から眺め、ことばを分解して別の形に組み立て直し……とかれの検証の作業は限りなく繰り返される。常に自分をこえてゆくことのみが、まことの自分というものだとかれは言っているようである。

みづからを知らん事をもとむるは、いけるものさだまれる心なり。しかあれども、まことのみづからをばみるものまれなり、ひとり仏のみこれをしれり。(中略) 仏の言ふみづからは、則ち尽大地にてあるなり。しかあれば、みづからと知るも知らぬも、皆ともにおのれにあらぬ尽大地はなし(後略) (正法眼藏・唯仏与仏)

親鸞も道元も、今から歴史を見れば、一つの社会が崩壊して人ひとりひとりが生活の底に、なにか新しい、自分が立つ土台を探し求めずにはいらなかった時代に生きていたのだ。(1994年1月)